

## 第3章 山岳部の登山を支えるチームを作ろう

山岳部で安全に登山を楽しむためには、次の①～③が必要である。

- ①自立した登山者（登山の特殊性を理解し、適切に対処できる自立した登山者になろう。）
- ②タフなパーティー（PDCA サイクルなどを活用して、万に備えているタフな登山パーティーを作ろう。）
- ③登山チーム（本部や関係機関による機能的な支援体制のある登山チームを作ろう。）

### 1 登山の特異性と自立した登山者

登山は特殊な環境で行われる特異な運動である。これらに適応するには、まずこの特異性を理解し、そこに内在するリスクに注意を払う必要がある。

- (1) 環境面 高い標高では低酸素や低温となり、強い日射・風・雨・雪・雷などの天気は頻繁に変化する。日本では四季の気温差や地域差も大きい。これらは複合して人に影響を与える。
  - (2) 運動面 重い装備や食糧を背負って長時間歩くのが基本である。登山道は不整地で登り下りがあり、テント泊を伴う登山もある。
- これらの特異性は登山を構成する本質であるため、これらを全て避けたら、登山ではなくなる。また、登山道や道標を整備しても、特異性に内在するリスクを直接排除することはできない。

#### ▶指導のポイント

このような特異性ゆえに、登山は観光旅行ではなく危険を内在した野外スポーツであることを普段から伝え、共有しよう。

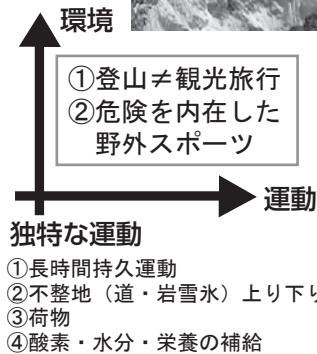
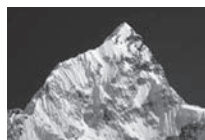
#### 特異な環境と登山という運動

登山道整備と情報提供だけでは登山事故はなくせない!

変化する厳しい自然環境

- 1) 高度→低酸素, 低温
- 2) 風、濡れ→低温
- 3) 季節・地域差  
(都市でのサービスなし  
自助努力が基本)

- 4) 気候変動・都市化  
(豪雨・温暖化)  
↓  
土砂崩れ・雪崩  
(自然の脅威増加)



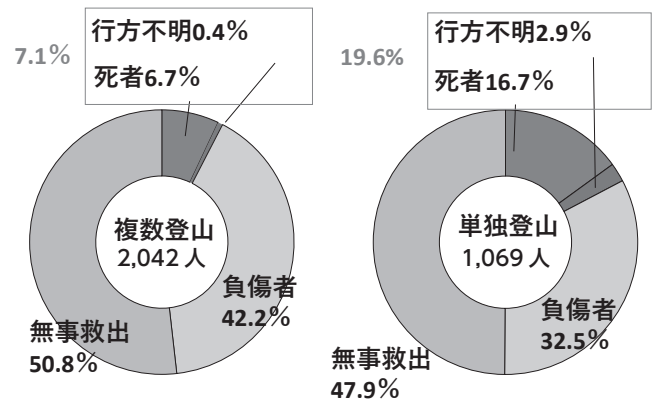
### 2 タフなパーティー

#### (1) 単独登山より安全性が高いパーティー登山

平成 29 年の山岳遭難事故統計によれば、単独登山の人の事故者で死亡・行方不明の割合は、複数登山に比べて3倍近い。この傾向はここ数年続いている。パー

ティーを組んでいれば、誰かが気づき、早く対処できる。救命に関する複数登山の優位性が現れている。

単独・複数登山者の遭難事故内訳 (H29.警察庁)



リスクの多い登山では、①十分に話し合っ、無理のない計画を立て、②行動中には仲間の異変に気づき、③小さい問題の時からお互いに助け合う。④その時の状況判断は、登山して初めて学び合う貴重な場面である。この一連の流れがPDCA サイクルである。

#### ▶指導のポイント

ア 仲間を気遣い、助け合うために、優れたリーダー（指導者（顧問等））とフォロワー（メンバー）相互の信頼関係を日常的に養おう。

イ 登山を安全に成功させる初めの一步は、ミーティングです。参加者みんなに無理のない企画・計画を十分話し合おう。

ウ タフな登山パーティーになるには、普段からの①話し合い②気づき合い③助け合い④学び合い!

#### (2) 登山中のリスクマネジメント

登山中、リーダーやメンバーは、お互いの様子の変化、天気の変化、地形の変化などに常に注意しながら行動すべきである。小さな異変も見逃さないことがリスクマネジメントの基本である。

リスクの要因となる項目が重なってくると対処できなくなる。リスクを数えて、ある数を越えたら、エスケープや引き返すなどの行動に迷わず切り替える必要がある。リスク項目の例を以下に示す。

実行 リスクマネジメントによるチェック(登山中)

(例) 登山中断と遭難回避を仲間で事前に約束

- 保険 (1) 山岳遭難対策保険
- 登山届 (2) 自宅、入山口や警察
- 体調管理 (3) 日常生活、(4) 直前(睡眠・食事)
- 体感気温 (5) 高度、(6) 天候、(7) 風速
- 体調 (8) 筋力、(9) 反射反応、(10) 平衡性
- 装備 (11) 雨がっぱ・防寒、(12) 食糧・燃料
- 日程 (13) チェックタイム、(14) 日没

▶指導のポイント

- ア 勢いづいたパーティーを止めるのは難しい。笛や大きな声でパーティーを止める練習をしよう。
- イ 一旦止まって行動を評価するための場所や時間を入山前に決めておくと、パーティーを止めやすい。
- ウ エスケープルートや引き返す時の危険箇所や引き返す時間（チェックタイム）も事前に決めておこう。

(3) 事故発生後のダメージコントロール

事故が発生したら、それが発展しないように最小限のダメージにとどめるように努める。そのためにメンバー全員の安全を確保し、次に要救助者の負傷など身体的に緊急性のあるものを把握・対処する。(第3編第5章「危急時対策」, 第7章「登山の医学」を参照) 緊急性を認めたら、迷わず支援チームに緊急連絡して、助言や救助を要請すること。

3 支援体制のある登山チーム

登山中に他パーティーが近くにいたら、共助をお願いすることもある。しかし常に他パーティーが近くにいるとは限らない。

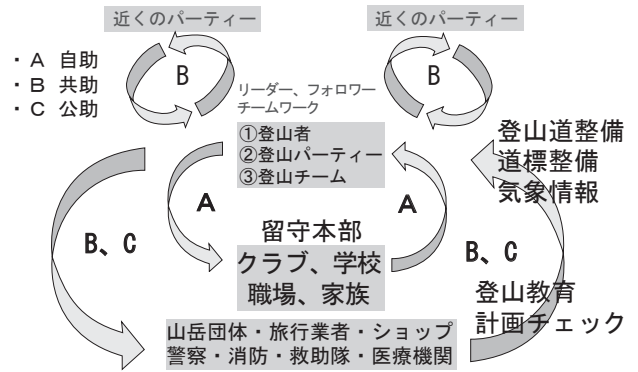
そこで、万一に備えて、事故パーティーを救助するための支援体制を事前に決めておく。これには、消防・警察・病院だけではなく、登山ガイド、山岳団体、登山道具店なども加えた大きな連携があっても良い。このような支援体制をもった登山チームを構成しよう。

この登山チームは、遭難防止にも積極的な役割を果たすことが期待される。たとえば、登山計画の相談、行動中に判断の迷いなど、遭難しないように事前の助けになってもらう。

特に、新しく山岳部の顧問になった指導者には、登山行動のこと、気象のこと、医療的な対処などの面からも支えてもらえる機能的な登山チームが必要である。

スポーツ庁はすでに各都道府県の教育委員会を通じて、登山計画審査会の設置を全国に指示した。この登山計画審査会も登山チームの一つとして高校の山岳部の活動を支える仕組みである。

登山チームという機能的な安全管理体制(システム)づくり



参考：「リスクマネジメントとダメージコントロール」村越真、登山研修 vol. 32(2017)、44-54;同、登山文化 vol. 18 (2017)、52-62.

▶指導のポイント

- ア 登山者と登山パーティーだけで問題を抱え込まず、他に相談や助言を受ける仕組みを作ろう。
- イ 事故が発生してからの支援だけでなく、事故防止のために働く登山チームを活用しよう。

【演習問題】

- 1 登山の環境と運動の特異性とリスクを挙げよう。
- 2 登山道や道標が整備されれば、登山の事故は防げるか、事故防止には何が必要か話し合おう。
- 3 登山パーティーや支援体制を含む登山チームが安全登山に果たす役割についてまとめてみよう。

(北村憲彦)